

ツールを活用した実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）による事例

1 プロフィール

学部・学年	中学部・第3学年
障害の種類・程度や状態等	不安障害 中2〇月入院・中3〇月退院（〇か月間） 分教室での学習期間 中3・4月から〇月まで（約2か月間） ・小学校低学年から通院し投薬治療を始めた。 ・小学校中学年から特別支援学級に在籍。中学1年の半ばから不登校となり、2年の3学期に当院に入院した。 ・病棟での生活に慣れた3年の4月から分教室での学習を開始した。

2 実態把握

＜転入時の本人の様子＞

- ・学習の空白期間が多かった。
- ・休憩時には体を動かしたり、ゲームをしたりするなどし、友達と過ごす時間を楽しんでいた。
- ・自分から他人に話しかけることが少なく、困ったときに人に相談できない。気持ちや感情を表出することができず、ストレスへの対応や気持ちのコントロールが困難なようである。
- ・生活面や学習面に関して、説明や周囲の状況から全体像を理解することや見通しをもって取り組むことが困難で、次に何をすべきかが分からないようである。
- ・周りの音などが気になり、学習や活動に集中できないことがある。

＜※「自分メーター」の結果から＞

生徒の回答から見られた課題（自己評価）

こころ	④気持ちのコントロールが難しい ⑤気持ちを言葉で伝えられない
しゃかい	④困ったときに相談できない ⑤相手の気持ちを察するのが難しい
がくしゅう	④集中力の持続が難しい
からだ	②体力に自信がない ④じっと待つのが難しい ⑤周りの音などが気になる
せいかつ	①予定変更が苦手 ②見通しをもちにくい ③整理整頓が苦手 ⑤落ち着いて過ごせていない
みのまわり	③身だしなみ ⑤ストレスへの対応

※「自分メーター」とは、研究指定校が独自に使用しているツールの名称です。  
「ふりカエルシート」と同じく、児童・生徒自身が学習面、学校生活面などを自ら振り返ることで、自分自身のことを客観的に理解するためのチェックリストです。

3 自立活動の流れ図

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中でみられる長所やよき、課題等について情報収集  
別紙へ

②-1 収集した情報 ① を自立活動の区分に即して整理する段階

1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
	・気持ちのコントロールが難しい。 ・ストレスへの対応がうまくできない。	・困ったときに自分から相談することができない。	・周りの音などが気になり、落ち着いて過ごせないことがある。 ・説明や周囲の状況などから概要を把握し見通しをもって取り組むことが苦手。		・気持ちを言葉で伝えられない。

②-2 収集した情報 ① を自立活動の区分に即して整理する段階

- ・分教室で学習することに対する戸惑いが見られる。教室内ではほとんど話すことがない。
- ・自分の意思や意見を述べることがない。質問や提案をすると、「どちらでもいい」「それでいい」といい、自分から表出することが少ない。
- ・友達の意見に流されやすく、今何の活動や学習をしているか分からないまま参加している様子である。
- ・困ったときに自分から話をしたり相談したりすることができない。
- ・周囲の物音や人の動きなどが気になり、学習に集中できないことがある。

②-3 収集した情報 ① を退院後の姿の観点から整理する段階

- ・新しい環境で自分の居場所をつくり、安心して学校生活を送ることができるようになってほしい。
- ・相談できる教師などに自分の気持ちや不安、悩みなどを伝えられるようになってほしい。

③ ①をもとに②-1、②-2、②-3で整理した情報から課題を抽出する段階

- ・簡単な選択を伴う活動などにより、自分の意見を伝えられる場面を増やすこと。
- ・楽しく友達と関わる活動を経験し、集団での活動に慣れるとともに、成功体験を得ること。
- ・視覚教材などを活用し、学習への見通しがもてるようになること。
- ・集中して取り組める課題や、落ち着いて学習できる環境を把握し、自分の課題に一定時間取り組めるようになること。

④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階

- ・集団での活動で、友達とかかわる経験や成功体験を数多く味わい、学習や活動への楽しさや達成感をもてるようになる。
- ・視覚教材や落ち着いて取り組める学習環境などの工夫により、集中して学習できるようになる。
- ・楽しく関わる経験を通じて、親しい友達や信頼できる教員などに、自分の意見や気持ちを伝えられるようになる。

⑤ ④に基づき設定した指導目標（ねらい）を記す段階

課題同士の関係を整理する中で、今指導すべき指導目標として

- ・集団での学習や活動を楽しみながら、自己肯定感や学年への所属意識を高める。
- ・落ち着ける場面で、親しい人などに、自分の気持ちや意思を伝える。

⑥ ⑤を達成するために必要な項目を設定する段階

指導目標（ねらい）を達成するために必要な項目を選定	1 健康の保持	2 心理的な安定 (1) 情緒の安定に 関すること。	3 人間関係の形成 (4) 集団への参加 の基礎に関する こと。	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション (2) 言語の受容と表出 に関すること。(5) 状況 に応じたコミュニケー ションに関すること。
---------------------------	---------	----------------------------------	---	---------	---------	--

⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント

- ＜自己肯定感や所属意識を高めるために＞3 (4)、6 (2) と6 (5) を関連付けながら設定した指導内容が⑧のウ、エ、オである。
- ＜自分の気持ちや意思を伝えられるようになるために＞2 (1) と6 (2) を関連付けながら設定した指導内容が⑧のア、イである。

⑧ 具体的な指導内容を設定

設定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア 週に1回、担任と個人面談をして、個人目標の設定と振り返りを行うことで、悩みや不安を表出する。	イ 月初めに個人面談の中で、自分分析のための自分メーター（ふりカエルシート等）を用いて、自分を知り、自分の変化を知ることを行う。	ウ ソーシャルスキルの指導として、小集団でのコミュニケーションゲームを行う。その中で、自分の意見を言う場面を設定する。→実践事例	エ 行事や生徒会活動への参加は、その活動に対して褒めて自己肯定感を高める。	オ クラス内での室内レクにおいて、自分の感情を出しても大丈夫だと思える環境にする。
-------------------------	--	--	--	---------------------------------------	---

実態把握

指導すべき課題の整理

項目間の関連付け

<指導目標について>

「自分メーター」の分析から、「自信がない」、「見通しをもちにくい」、「判断が受身になりがち」、「周りに意見が流される」という課題を整理し、「自己肯定感を高める」、「集団に慣れる」、「自分の意見を伝える」ことを指導目標にしました。

その後、ソーシャルスキルゲームや学級内レクリエーションなどにより、分教室での居場所づくりに向けて取組を行いました。その結果、担任への気持ちの表出が増えてきたことや集団活動で笑顔が見られるなどの変化が見られるようになってきました。一方、何かを決めるときに問いかけると、「どっちでも」、「じゃあそれで」と答えるなど、自分で決めることは難しかったです。

そのため、課題を再整理し、選択肢から自分の意見を「選んで伝える」経験ができる活動を行うことにしました。(図1)

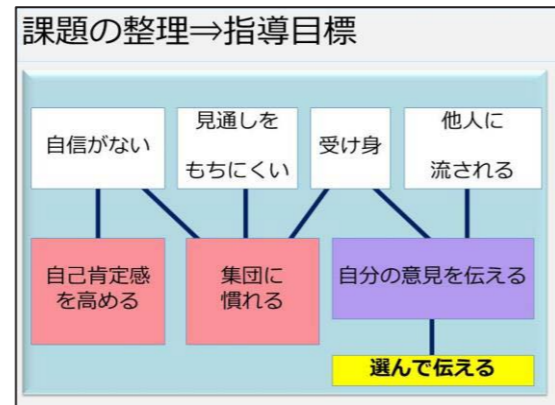


図1

<実践事例1（自立活動の授業より）>

【どっちが好き？】

①ねらい

- ・どちらかを「選ぶ」経験を身に付ける。
- ・回答を見ながらやりとりをすることで、コミュニケーションの楽しさを知る。
- ・自分と違う考えの人がいることを知る。
- ・自分と同じ考えの人がいることを知り、「同じ意見で嬉しい」という気持ちを味わう。

②活動内容（図2）

③活動時の様子

友達と「どっちにする？」と会話をしながら、回答を決めることができました。どちらの回答を選ぶかよく考えていましたが、友達の答えに影響を受けて、自分の考えよりも友達の回答と同じ方を選ぶことを優先させてしまうこともありました。

⇒自主的に選ぶことまでをねらい、指導内容を再検討しました。

図2

<実践事例2（自立活動の授業より）>

【コンセンサスゲーム】

※周りとの合意形成（コンセンサス）する必要があるゲーム

①ねらい

- ・選択肢から答えを選び、自分の考えを言う。
- ・他の人の考えを知る。
- ・話し合いをしていろいろな意見から1つの結論を導き出す。

②活動内容（図3）

③活動時の様子

順番に自分の意見を発表する流れにしたことで、周りに影響されず、自分の意見を伝えることができました。

⇒「選んで伝える」、「自分の意見を伝える」経験ができました。

図3

<退院時の引継ぎ>

入院前から、地域の前籍校では不登校であり、退院後の通学も難しいと思われたため、新たな通学先として他の学校を検討しました。生徒は、友達関係に悩み消極的でしたが、分教室に在籍したまま、他の学校へ体験学習を実施することにしました。

実施前は不安が強かったようですが、何回か体験すると、転学先の学校の生徒たちの雰囲気になじみ、「ここに通いたい」と前向きな発言が聞かれるようになりました。

退院までの3週間、週に2回退院に向けた指導を行いました。退院後の生活への不安が軽減されたタイミングで退院となりました。結果として、分教室の在籍は約2ヶ月間でした。

保護者に個別面談で分教室での様子を伝え引継ぎました。また、転出先の学校には、本校で行った課題に対しての取組と支援について、学校間での引継ぎを要望するか確認し、病院のソーシャルワーカー主催で関係者会議を行い、各関係機関と退院後の生活支援について情報共有を行いました。転学先の学校へは、「自分メーター」の取組と自立活動の内容等を、自立活動の引継ぎシートを用いて、学校における課題と支援、本人の変化について引き継ぐことができました。

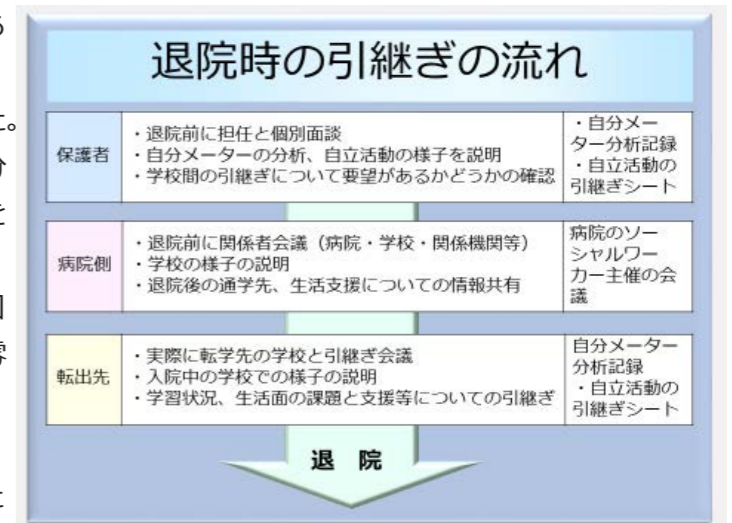


図4

<まとめ> <生徒の変容等>

自分メーターは、毎月初めと退院時に合わせて4回行いました。(図5)

30項目中約半数の14項目について、自己評価が高くなっていました。

- 「自分の気持ちのコントロールができる」
- 「自分の気持ちを伝えられる」
- 「相手の気持ちを察することができる」
- 「落ち着いて過ごすことができる」
- 「ストレスに対応がすることができる」

の項目は、重点課題として取り上げていたもので、これらの回答は全て評価が高くなっていました。

一方、「学校のルールを守ることができる」、「先生の指示がわかる」の項目については、本人評価は下がっていました。

要因として、学校生活を楽しむことができ、授業中の私語などにつながったことが考えられます。今までの学校生活とは異なり、自分を表出して楽しく過ごせていたという評価と教師は捉えています。

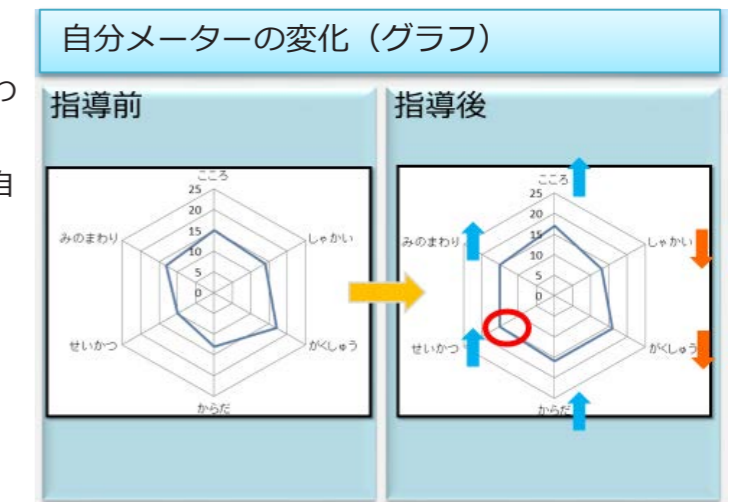


図5

自立活動の実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）による事例

1 プロフィール

学部・学年	小学部・第1学年
障害の種類・程度や状態等	消化器系疾患 9月入院・1月退院（約4か月） 食事療法を行っているが、安定して授業に参加することができている。

2 自立活動の流れ図

① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中でみられる長所やよさ、課題等について情報収集					
<ul style="list-style-type: none"> <li>都外からの入院で、母親以外の家族と離れて長期間生活することになった。母親は近隣の施設で宿泊し、毎日の食事と入浴は、本児に付き添っているが、就寝時は施設に戻る。家族と離れて生活することを不安に感じ寂しく思っているようである。担任や母親に、怖い夢を見たと訴えることが多くある。</li> <li>幼少期から腹痛や嘔吐などの症状があり、入院前は地元の医療機関に通院していた。食物アレルギーがあり、食事療法を行っている。アレルギー対応のため、他の児童と異なる食事をすることが多いが、本人は気にすることなく素直に食べている。</li> <li>まれに腹痛を訴えることがある。食事制限があり、授業中に空腹を訴えることがある。</li> <li>話をすることが好きで、担任やよく慣れた大人や友達とはたくさん話す。卓球やカード、ゲーム機などで友達と遊ぶことを楽しんでいる。</li> <li>文を読むことに課題があり、語彙が少ない。板書を書き写すことにも時間がかかる。助詞の書き誤りが多く、促音や拗音を正しく書くことが困難。算数の計算はできるが、文章問題の読み取りは苦手である。</li> <li>頻尿であり、排尿の失敗が時々ある。失敗を母親に叱られるのではないかと気にすることが多い。</li> <li>初めて会う人や新しい活動を始めるときは、緊張しやすく、小集団の中でも自分の意思などを伝えることができないことが多い。環境に慣れるのに時間がかかる。</li> <li>一定時間継続して学習や活動に取り組む経験が少なく、すぐに「疲れた」と言ったり活動を中止したりする。午後の学習では集中が途切れがちである。</li> <li>手先を使った活動が苦手で、はさみでまっすぐ切ることや、枠をはみ出さずに色を塗ることなどがうまくできない。</li> </ul>					
②-1 収集した情報 ① を自立活動の区分に即して整理する段階					
1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>治療による食事制限があり、空腹を訴え授業や活動に集中できないことがある。</li> <li>腹痛を訴えることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>不安やさみしさのためか、怖い夢を見ることが多い様子である。</li> <li>担任と一対一のときは消極的な発言や悲観的な言動が多い。</li> <li>授業後半や午後の授業では意欲が低下しがちである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>関わりの少ない教員や初対面の児童などとは緊張してうまく関われない。</li> <li>集団での活動に参加することを嫌がったが、慣れてくると自信が付き活動を楽しみにするようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字の読み誤りや板書を書き写す際の書き誤りが多い。</li> <li>簡単な文の読解が困難であり、算数の文章問題を苦手としている。</li> <li>算数の計算はできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>はさみの使用や枠をはみ出さずに色を塗ることなど、手先を使った活動の経験が少なく苦手になっている。</li> <li>疲れやすく、45分間学習に参加し続けることが難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小集団であっても、複数の友達などの前で自分の意見を言うことが苦手である。</li> <li>話すこと自体は好きであり、身近な教員や親しい友達とはよく話す。</li> </ul>
②-2 収集した情報 ① を学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理する段階					
<ul style="list-style-type: none"> <li>家族と離れて暮らすことへの不安や寂しさが強く、悲観的な発言や消極的な態度が見られる。</li> <li>治療による食事制限や経験の少なさ、体力の不足などから、授業に一定時間集中して参加することが困難である。</li> <li>初めての活動やかかわりの少ない人と行動することに不安感が強く、緊張が長く続き活動に参加できなくなることがある。</li> <li>教科の学習では、読むことや書くことに困難があり、板書などを見て正しく書くことが課題である。</li> <li>話すことが好きで、担任や親しい友達などとは楽しそうにたくさん話す。環境に慣れば、集団での活動にも楽しそうに参加できるようになる。</li> </ul>					
②-3 収集した情報 ① を退院後の姿の観点から整理する段階					
<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい環境や人間関係の中でも自分の気持ちや要求などを適切に表現できるようになってほしい。</li> <li>健康を維持するための生活習慣を身に付けながら、様々な学習や活動に自信をもって取り組めるようになってほしい。</li> <li>苦手な学習にも意欲的に取り組み、できることを増やしてほしい。</li> </ul>					

実態把握

指導すべき課題の整理	③ ①をもとに②-1、②-2、②-3で整理した情報から課題を抽出する段階						
	<ul style="list-style-type: none"> <li>不安や寂しさを適切に言語化し、自分の気持ちや要求として適切に表現できるようになること。</li> <li>様々な人とかかわったり一緒に活動したりする経験を増やし、集団での活動に慣れること。</li> <li>学習に必要な用具の扱いや操作に慣れ、手元をよく見て作業をする習慣を付けること。</li> <li>一定時間継続して学習や活動に取り組めるようになること。</li> <li>自分の健康状態を意識し、体調が悪い時にすぐに周囲の大人に伝えるなど、適切な対応ができるようになること。</li> <li>基本的な読解の力を身に付けること。</li> </ul>						
	④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階						
	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な人と関わり集団の中で活動する経験により、自分の気持ちや意見、体調の変化等を伝えられるようになる。</li> <li>学習に必要な用具の扱いや操作に慣れ、一定時間集中して学習に取り組めるようになる。</li> <li>読むことや書くことの学習に継続的に取り組み、基本的な読解の力を付ける。</li> </ul>						
	⑤ ④に基づき設定した指導目標（ねらい）を記す段階						
	課題同士の関係を整理する中で、今指導すべき指導目標として	<ul style="list-style-type: none"> <li>集団での学習や活動に慣れ、一定時間集中して取り組むことができる。</li> <li>自分の気持ちや状態、意見などを適切に表現できる。</li> <li>読むことや書くことの基本的な力を伸ばす。</li> </ul>					
項目間の関連付け	⑥ ⑤を達成するために必要な項目を設定する段階						
	指導目標（ねらい）を達成するために必要な項目を選定	1 健康の保持 (5) 健康状態の維持・改善に関すること	2 心理的な安定 (2) 状況の理解と変化への対応に関すること	3 人間関係の形成 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること	4 環境の把握 (2) 周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること	5 身体の動き (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	6 コミュニケーション (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること
	⑦ 項目と項目を関連付ける際のポイント						
	<p>&lt;自分の意見・考えなどの表出のために&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2 (2)、3 (3)、5 (5) と 1 (5) を関連付けながら設定した指導内容が⑧のアである。</li> </ul> <p>&lt;学習道具の操作や扱いに慣れるために&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4 (2) と 5 (5) を関連付けながら設定した指導内容が⑧のイである。</li> </ul> <p>&lt;読むことや書くことの基礎的な力を伸ばすために&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4 (2) と 5 (5) を関連付けながら設定した指導内容が⑧のウである。</li> </ul>						
⑧ 具体的な指導内容を設定							
設定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア 小集団での活動や教師との一対一の対話で、自分の意見や考えを表出できるようにする。空腹や腹痛など自身の体調の変化に対応し、周囲に訴えることができるようにする。	イ 体全体を使う粗大運動や手先を使う作業を効果的に取り入れながら、ハサミや筆記用具などを扱う経験を増やす。	ウ 板書や教科書を書き写す際に、補助具を用いて着目すべき文字を確実に確認できるようにする。助詞や読み誤りの多い字に印をし、ポイントを意識しながら読むことができるようにする。				
→ 学級活動、個別指導、その他の教育活動全般で	→ 自立活動の時間の指導で（実践事例1、2）		→ 国語、算数の指導で				

<実践事例1（自立活動の授業より）>  
「体を動かそう（ボッチャ、風船バドミントン、なわとび）」

①ねらい

- ・ 楽しみながら体を動かし、持続的に取り組む力を付ける。
- ・ 粗大な運動や道具を使った微細な運動などにより、体の様々な部位を意識して動かす。
- ・ 活動を通して、複数の友達と関わることを楽しむ。

②指導場面 自立活動（集団指導）

③指導内容

（1時間の活動の流れ）

- ・ 準備体操
- ・ 「体を動かそう」（ボッチャ、風船バドミントン、なわとびなど）  
練習 → ミニゲーム
- ・ まとめ  
感想、次にやってみたいことの発表

※毎回メンバーが変わるため、1時間完結の活動とし、題材を変えて繰り返し扱った。

④活動時の様子



- ・ ボッチャでは、教師の示したボールの投げ方の見本を見て模倣しようとするが、慣れていないためうまく投げることができませんでした。バドミントンやなわとびでは、普段使わない腕の使い方など、普段と異なる体の動かし方があり、力の調整がしにくく苦労していましたが、ゲーム自体は楽しんでいました。
- ・ 次回の活動予告をすると、「疲れるからやりたくない」という発言をしていましたが、実際に活動が始まると、よく体を動かし一生懸命に取り組んでいました。
- ・ 活動終了時にも「疲れた」と言うことがあり、本当に疲れているというよりも精神的な疲れの方が大きいようでした。疲れて休みたいと思ったときに、自分で担当の教師に伝えて休むことができるようにすることを次のねらいとしていきます。

<前籍校担任への引継ぎ>

自立活動に関連した引継ぎ内容

- ・ 児童の入院時の様子と学習面や行動面の課題
- ・ 重点的に取り組んだ指導内容
- ・ 自立活動の指導で行った活動と成果
- ・ 退院後の学校生活に向けて

- ・ 折り紙やビーズを使った制作活動で、手指を使うことがたいへん上手になったことを伝え、学級の友達にも得意なこととして紹介するようお願いしました。
- ・ 食事や生活の制限により体力が低下し、体の動きそのものは支援が必要な部分がたくさんありますが、自信をもって取り組める活動が増えたことで、学習全体への意欲も高まってきました。
- ・ 久しぶりの学校や学級の友達とも、自信をもって関わるできるよう、特にできるようになった点や成長した点を伝えるようにしました。

<実践事例2（自立活動の授業より）>  
「折り紙で作ろう」

①ねらい

- ・ 手先に注目し折り紙の角や縁をよく見て丁寧に折る。
- ・ 自分で作品をつくることを楽しみ、活動に自信や意欲をもって取り組む。

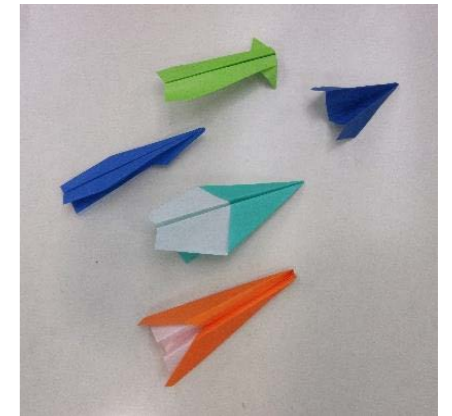
②指導場面 自立活動（個別指導、集団指導）

③指導内容

- ・ かんたんな折り紙をしよう（折り方の基礎、「きのこ」の制作）
- ・ 紙飛行機を遠くに飛ばそう（紙飛行機の制作、紙飛行機飛ばし）
- ・ いろいろな折り紙を折ってみよう（「しゅりけん」など）

④活動時の様子

- ・ 児童は、折り紙の経験がほとんどなく、机に紙を置くこと、手前から向こう側に折ることなど基本の指導から始めました。初回は、角と縁を折り重ねることや折れ目をしっかりつけることなど、その都度声をかける必要があり、なかなか難しい様子でした。
- ・ 紙飛行機づくりでは、速く遠くに飛ばしたいという意欲から、折り方が少しずつ上手に丁寧になっていきました。何種類もたくさんの折り紙を折るうちに、自分で折り目や重なりを意識しながら折ることができるようになってきました。
- ・ 1回ごとの作品の仕上がりで満足でき、次回以降への意欲につながりました。また、覚えた折り方を友達に教えるなどし、自信をもって生き生きと活動していました。



<まとめ> <児童の変容等>

- ・ 折り紙やビーズを使った取組を行うことで、手指を使うことが上手になりました。
- ・ 食事や生活の制限により体力が低下し、体の動きそのものは支援が必要な部分がたくさんありますが、自信をもって取り組める活動が増えたことで、学習全体への意欲も高まってきました。

